

## 放牧馴致は呼吸器病などの病気予防に有効

KARIYA Yoshihiro  
 飯屋 喜弘  
 放牧管理部 衛生管理研究室

放牧牛が広い草地でのんびりと草を食べている風景は見る人の心を和ませてくれ、やはり牛には放牧が一番似合うという気持ちになります。しかし、牛を舎飼から放牧に出すにはそれなりの手順を踏まなければなりません。それは舎飼の時と放牧では牛を取り巻く環境が大きく違うからです。舎飼の時は屋根や壁で暑熱、寒冷、風、雨、直射日光から守られていますが、放牧地ではこれらの影響を直接受けます。また、農家では小頭数で飼われていた牛が放牧では大きな群に入れられて、社会的な環境も大きく変わります。さらに、牛が食べる餌は今まで濃厚飼料や乾草を与えられていたものが、生草だけを自分で選んで食べなければなりません。このような変化を入放時に一度に与えると牛は大きなストレスを受けて病気にかかりやすくなると言われています。しかし、本当にそうなのかはよく分かっていません。そこで農家から牛を預かって春から秋に放牧している公共牧場で馴致をやった牛とやらなかった牛の病気の発症率や増体量を比べてみました。

農家でやる放牧馴致には屋外の気象環境、群飼、青草そして粗飼料だけを食べることに慣れさせることなどがありますがその全てで、馴致をした牛はしなかった牛よりも呼吸器病や消化器病を発症する率が低く、これらの病気で死んだり、症状が重くて放牧を続けられずに途中で退牧させられた牛も少ない結果が得られました(図1)。また、1日当たりの増体量は馴致をした牛の方が多くなっています(図2)。このように入牧前に牛を放牧環境や餌に慣らすことは放牧牛の健康維持や生産性向上に大変有効です。放牧馴致をするためにはそれなりの土地、施設そして労力が必要で、実施していない農家も多いのが実情ですが、このデータが放牧馴致を始める切っ掛けになれば幸いです。

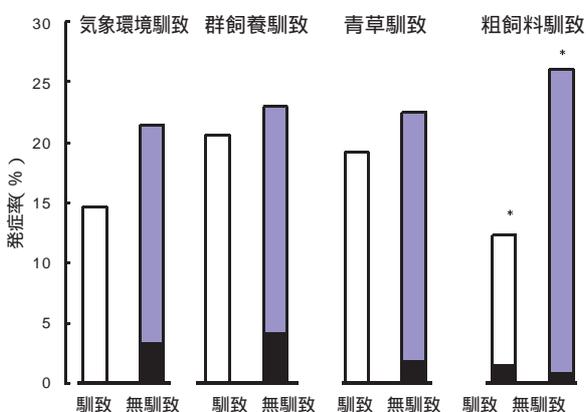


図1. 放牧馴致の形態別に比較した放牧期間中の呼吸器病等による治療率  
 黒塗り部は死亡および途中で退牧した牛の発生率  
 \*: 同一馴致分類内の同符号間で有意差有り(P < 0.05)

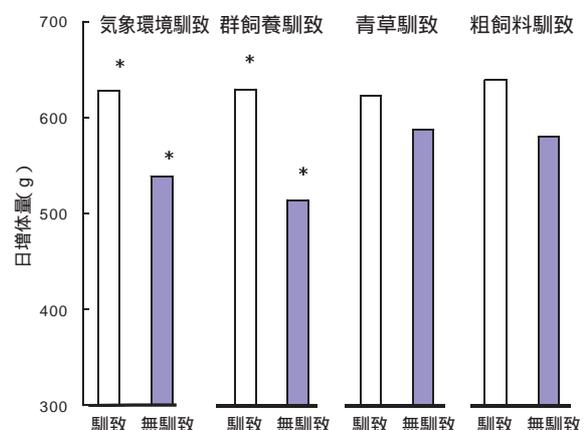


図2. 放牧馴致の形態別に比較した放牧期間の日増体量  
 \*: 同一馴致分類内の同符号間で有意差有り(P < 0.05)